

令和7年2月3日

世田谷区立笹原小学校

校長 吉田 健二様

区立笹原小学校学校関係者評価委員会

委員長 黒住 早紀子

令和6年度学校関係者評価委員会報告書

1. はじめに

令和6年度世田谷区立笹原小学校学校関係者評価委員会は、世田谷区教育委員会作成「世田谷区立学校 学校評価システム」に基づき、本校の取組の成果について評価し、ここに報告する。

本報告書作成に用いた資料は次の通りである。

- ・児童アンケート（対象は5・6年生）
- ・保護者アンケート
- ・地域の方々アンケート
- ・学校評価（自己評価）
- ・教職員との意見交換
- ・学校公開期間中の授業見学
- ・学校行事の見学
- ・委員が学校を訪問した際の非公式な教員との会話と授業見学

今年度の児童の全体回答率は88%であり、昨年度（85%）と同程度の回答率であった。保護者の全体回答率は69%であり、昨年度（70%）と比して大きな変化はなかった。地域の方々の回答率は46%で、こちらも児童および保護者と同様に、昨年度の回答率（47%）と大差ない。

一昨年度に調査方法の電子化を図ったところ、回答率が大幅に低下した。昨年度は学校からの回答の呼びかけが功を奏し、回答率が上昇した。今年度も昨年度の上昇率を保った要因を探ると、アンケート回収期間中に学校側が対象者に送信するメールの文面中に、毎回の回収率（回収数/母数）も載せるといふ工夫がなされていたことが分かった。一見すると些細な工夫のようにも見えるが、このような仕掛けは、回答動向を客観的に確認でき、かつ回答者にとっては自身の行動が全体に与える影響を視覚的に確認できるという点で、効果的な方法と言える。適正な調査のためには回答率も重要であるため、今後も回答率を維持できるとよいだろう。

2. 重点目標について

今年度の初めに学校長が設定した令和6年度の重点目標は以下の3つである。

- I 主体的な学びを通じた思考力・判断力・表現力の育成
- II 多様性を認め合い、よりよい集団をつくる子どもの育成
- III 自分の健康に関心をもち、よりよい生活を作る子どもの育成

学校関係者評価委員会は重点目標がどの程度達成できたかを確かめるため、児童アンケートと保護者アンケートと地域の方々アンケートに、独自の評価項目を作成して調査を行った。その結果は表1-1～1-3の通りである。表内に記した数値は、回答のうち「とても思う」と「思う」の回答数の合計（％）である（以下「肯定的回答率」）。

項目ごとに分析すると、重点目標 I および重点項目 II に関する項目では、児童の肯定的回答率は昨年度より全体的に上昇した。保護者の肯定的回答率も昨年度よりも上昇した。重点目標 III に関する項目では、児童の肯定的回答率は昨年度より上昇した一方で、保護者の肯定的回答率が昨年度より低下した。この点については以下の表1-3について分析する箇所を考察する。

重点目標に関する項目を全体的に眺めると、児童の肯定的回答率は平均8割を超えている点については、目標は達成されたと判断してよいだろう。保護者と地域の方々に関しては、数値的にみれば達成したとは言い切れないが、昨年度と比べるとどちらも肯定的回答率が上昇している。

表1-1 3つの重点目標に関する評価項目の結果

I 主体的な学びを通じた思考力・判断力・表現力の育成 評価項目	肯定的回答率の合計(%)	
	令和6年度	令和5年度
(児童アンケート)		
・私には 努力 できることがある。	86.4	75.0*
・私は、よく考えて判断し、 行動 することができる。	82.1	
・私は、自分の気持ちを友だちや先生に 伝える ことができる。	75.0	
(保護者アンケート)		
・子どもたちは、 努力 できることがある。	85.6	51.3*
・子どもたちは、よく考えて判断し、 行動 することができる。	60.1	
・子どもたちは、自分の気持ちを友だちや先生に 伝える ことができる。	58.8	

注* 令和5年度の質問項目は「私は、よく考えて判断し、**表現**することができる」であった。

重点項目Ⅰに関する項目では、児童、保護者ともに肯定的回答率は昨年度より上昇した。

今年度の質問項目は、令和5年度の質問項目である「私は、よく考えて判断し、**表現**することができる」（児童アンケート）と、「本校の子どもたちは、よく考えて判断し、**表現**することができる」（保護者アンケート）の文言を表1-1のように修正した。肯定的回答率の上昇は、もちろん今年度の重点項目への評価でもあるが、回答者がアンケートを通して聞かれている児童の姿をよりイメージしやすい質問となり、児童や保護者の実際の体験を回答に反映しやすくなったためとも考えられる。

表1-2 3つの重点目標に関する評価項目の結果

Ⅱ多様性を認め合い、よりよい集団をつくる子どもの育成 評価項目	肯定的回答率の合計(%)	
	令和6年度	令和5年度
(児童アンケート) ・私は、自分のよさや友達のよさを見付けることができる。	85.7	82.1
(保護者アンケート) ・本校には、多様性を認め合う雰囲気がある。	55.8	46.8

重点項目Ⅱに関する項目では、児童、保護者ともに肯定的な回答率が上昇した。本校では、多様性を自分や他者の「良さ」として受け止める雰囲気が醸成されていると考えられる。

表1-3 3つの重点目標に関する評価項目の結果

Ⅲ自分の健康に関心をもち、よりよい生活を作る子どもの育成 評価項目	肯定的回答率の合計(%)	
	令和6年度	令和5年度
(児童アンケート) ・私は、うがい・手洗いなど健康に気を付けている。	85.0	79.5
(保護者アンケート) ・本校の子どもたちは、感染症の予防等健康に気を付けている。	47.7	56.4
(地域の方々アンケート) ・本校の子どもたちは、感染症の予防など健康に関わる取り組みをしている。	--	68.5*

* 今年度から地域の方々のアンケートの質問項目から削除

昨年度に新型コロナウイルス感染症の感染症法上の位置づけが2類相当から5類感染症に引き下げられ、私たちの日常生活内での感染症との付き合い方の変化が生じている。行動制限やマスク着用義務なども緩和され、個人の判断に任させるようになった。このような社会的情勢を鑑みて、今年度は地域の方々アンケートでは本項目を削除した。

重点項目Ⅲに関する項目では、児童の肯定的回答率に上昇がみられた一方で、保護者の肯定的回答率は低下した。

この項目での保護者の肯定的回答率の低下は、子どもたちに様々な制限を強いらざるを得なかった状況が改善されている表れとも言えるだろう。一方で、児童の回答率は上昇している。コロナ禍を経て、うがいや手洗いという行動は日常的な習慣であるという健康意識が、子どもたちの間には定着しているのかもしれない。

3. 独自の取り組みについて

令和元年度から学校関係者評価委員会は笹原小学校独自の取組を評価の対象としている。表2は、1)言語活動、2)笹の子班活動、3)新しい教育活動、4)その他（あいさつ）に関する肯定的回答率の変化である。

表2 笹原小学校独自の取り組みに関する評価項目の肯定的回答率の過去5年間の変化

評価項目	令和2	令和3	令和4	令和5	令和6
1) 言語活動					
・私は、朝読書など読書活動を楽しんでいる。（児童アンケート）	73.2	75.2	76.5	64.4	64.3
・本校の子どもたちは、読書活動を楽しみ、読書に親しんでいる。（保護者アンケート）	78.7	79.1	67.4	55.4	64.4
・子どもたちは、読書活動を楽しみ、読書に親しんでいる。（地域の方々アンケート）	59.0	--	--	--	--
2) 笹の子班活動					
・笹の子班活動を通して、上学年や下学年の子どもたちと仲よく楽しく活動することができている。（児童アンケート）	81.1	79.9	87.4	76.5	79.3
・笹の子班活動は、子どもたちにとって有意義な活動であると思う。（保護者アンケート）	83.6	83.6	78.9	80.2	80.1
3) 新しい教育活動					
・本校は英語や外国語、ICTなどの教育に取り組んでいる。（保護者アンケート）	57.1	69.3	58.9	54.1	--
・本校は、英語や外国語、オリンピック・パラリンピック教室、ICTの活用など新しい教育活動に取り組んでいる。（地域の方々アンケート）	67.6	58.3	--	--	--
4) その他					
・私は、すすんであいさつをしている。（児童アンケート）				63.4	83.5
・本校の子どもたちは、すすんであいさつをしている。（地域の方々アンケート）				52.6	62.9

注）質問項目は年度により多少異なる。--は実施せず。

1) 言語活動について

言語活動の中でも、読書活動に関する項目の肯定的回答率は、この5年間で徐々に低下している。子

どもたちの読書離れや活字離れは、本校のみならず、文化庁や文部科学省による調査にも結果として現れており、背景には生活環境の変化やさまざまなメディアの発達・普及があることが指摘されている。

言語活動は、大きく分けると、「読む」・「書く」・「話す」・「聞く」の4種類がある。現代の子どもたちの言語環境は変化しており、特に「読む」環境や対象の変化は顕著で、書籍よりもタブレットやスマホなどの電子媒体の方が身近にある。ここではこれらの電子媒体を通じた「読む」活動は想定されていない。つまり、授業でタブレットを使って情報を読む活動については、この項目では評価しきれていないと言えるだろう。もちろん、紙媒体の書籍等を想定した読書活動がもたらす言語体験は重要である。読書による語彙力や知識、読解力や想像力、集中力の育成や、没頭体験、全身をつかって本と向き合う体験（本の厚みや紙の匂いなど触覚や嗅覚的刺激をとともなう統合感覚的な読書は、電子媒体では体験できない）を通じた子どもの発達の機会を保証するために、読書活動や読書習慣の育成・評価に力を入れることも必要であるが、現代の子どもが経験する言語環境を踏まえた「読む」をどのように育成・評価できるかを検討することも必要かもしれない。

2) 笹の子班活動について

笹原小学校で実施されている異年齢縦割り班活動である「笹の子班活動」は、年度により多少の上下はあるものの、5年間を通して高い肯定的回答率を維持している。

12月に開催される「笹の子まつり」に向けて、4月から児童は活動を始める高学年が中心となって班の構成員間の関係づくりから出し物の準備を進めるが、全体的な班数も多いため、班長を担う児童の数も多い。

今年度の卒業文集では、かなりの児童が「班長になった」・「お世話をするのが楽しかった」等、笹の子班活動について触れられている。そのような子どもたちの成長を保護者も見て感じているため、アンケートで「有意義である」と回答されているのかもしれない。

3) 新しい教育活動について

新しい教育活動の評価については、これまで外国語活動、英語、ICT教育等の内容が取り上げられてきたが、外国語活動・英語は教科化し、ICT教育は一般化するなど、急速な社会的状況の変化の影響を受けている。

ICTに関していえば、コロナ禍では「いかにして教師が生徒に授業を届けるか」が主な目的であったが、今では「一人一台あるタブレットを子どもたちがいかに活用してどのように効果的な学習活動を行うか」と目的がシフトしている。

今回の児童アンケートでは、1.学習についての下位項目の「授業では、考えたことを話したり発表しあったりする機会がある」に対する肯定的回答が高水準とはいえ、昨年度よりも低下している（88.4→86.4）。また、6.全般についての下位項目の「私は、家庭で宿題やe-ラーニングでの学習をしている」に対する肯定的回答は、約10ポイント上昇した（53.4→61.4）。児童の肯定的回答の多い項目の上位には、「先生たちは、ていねいに指導してくれる」（92.9）・「先生は映像やタブレットを工夫し、わかりやすい授業をしている」（88.6）・「学校生活は楽しい」（87.2）が挙げられていることから、本校での今後のICT活用の可能性の幅は大きいと考えられる。

4) その他

あいさつに関する項目では、児童の肯定的回答が63.4%から83.5%と大きな上昇がみられたことに對し、地域の方々の肯定的回答率は52.6%から62.9%と、上昇の幅に違いがみられた。ここにも「マスク（話さない）」・「ソーシャルディスタンス」等、私たちの日常生活や人との関わりに多くの制限をせざるをえなかったコロナ禍の残響があるように見受けられる。

本校内にはあいさつ週間の標語や「笹の子は 美しいことば 思いやることば を大切にします」というポスターが児童の目に入りやすい場所に掲示されており、教員側からすすんで児童に「おはよう」の声かけをする取り組みも日常的に行われている。道徳月間やあいさつ週間実施時には、教員が児童にあいさつの意味について説明する機会も設けている。

アンケートの数値上での差は目立つが、今は、子どもたちのあいさつや人との関わりに関する意識が変化の途上にあると捉えても良いだろう。あいさつといった日常的なものは、地道な日々の積み重ねにより習慣化していく性質がある。まずは現状の取り組みを継続することに意味があると考え、児童にとって安心・安全の環境・関係下にある学校内での教員との毎日のやりとりが、徐々に児童の地域での行動変化にも波及していくことに期待したい。

4. 委員・学校からの情報提供

本校を象徴する存在として“ポプラの木”があることが委員内から情報提供され、委員会内で情報交換がなされた。

本校にとっての“ポプラの木”とは、かつては卒業式で卒業生にポプラの挿し木が贈られていたり、本校オリジナルの曲である「ポプラの歌」を卒業式で歌ったりする伝統があったほど、卒業生や地域の方々には馴染みのあるものだそうだ。数年前の倒木により今は存在しないが、令和6年度末には新たに植樹する記念集会の開催予定があり、地域の方々も招待される。これを機に、あらためてポプラの木をシンボルとした教育的取組が実施されるならば、それが本校独自の新しい教育活動となる可能性がある。

5. キャリア・未来デザイン教育

世田谷区独自の「キャリア・未来デザイン教育」に関する評価項目の肯定的回答率を表3にまとめた。昨年度は概して肯定的回答率が低いことが指摘されていたが、今年度は全体的な肯定的回答率は上昇している。

項目ごとに見ると、児童アンケートの「区立中学校に関する情報が提供されている」と「学び舎の中学校に行ったり、中学生が来たりする機会がある」の肯定的回答は低下しているが、保護者アンケートの「学び舎の区立中学校について情報が提供されている」の肯定的回答率は高くはないが横ばいである。

「区立中学校に関する情報が提供されている。」という質問項目については、児童の回答率が昨年と比べて6ポイントほど低下している。少なくとも委員が学校に訪問した際には、本校では1階の下駄箱

を入れてすぐの掲示板で、近隣の幼稚園や小中学校のお知らせやお手紙が掲示されていることを確認している。

地域の中学校に関する情報を知ることが、進学希望先の情報を得るという意味以外に、自分が生活する地域について知るという意味合いもあるが、進学を間近に控える当事者である児童らにとっては、前者の問題意識の方が強いのではないだろうか。中学受験をする人口の割合も年々過去最高を更新しており、かつ多様な情報が溢れかえっている現代では、必要ときに必要な情報にアクセスできる情報提供に重きが置かれているのかもしれない。

表3 キャリア・未来デザイン教育に関する質問項目の肯定的回答率

評価項目	肯定的回答率の合計(%)	
	令和6年度	令和5年度
(児童アンケート)		
・自分の生き方や将来のことについて、考える授業がある。	64.3	52.2
・目標をもち、その実現にむけて努力している。	80.0	66.7
・区立中学校に関する情報が提供されている。	49.3	55.3
・学び舎の中学校に行ったり、中学生が来たりする機会がある。	60.0	75.7
(保護者アンケート)		
・本校の教員は、子どもに目標をもたせ、その実現のために支援している	49.3	51.6
・本校は、子どもの生き方や将来のことについて考える授業をしている。	44.5	34.4
・本校は、近隣の幼小中学校で構成する「学び舎」による幼稚園・小学校・中学校の連携や交流活動が行われている。	83.9	78.4
・「学び舎」の区立(幼稚園)中学校について情報が提供されている。	63.4	63.3
・私は、学校公開にすすんで参加している。	77.1	80.2
・私は、学校行事、PTAや地域主催の行事などにすすんで協力している。	61.1	64.4
・本校は、地域と連携して「キャリア・未来デザイン教育」の推進をしている。	45.1	40.5
(地域の方々アンケート)		
・本校は、地域と連携して「キャリア・未来デザイン教育」の推進をしている。	68.6	63.2

「目標をもち、その実現にむけて努力している」という質問項目に対する児童の肯定的回答は約13ポイント上昇している。「自分(子ども)の生き方や将来のことについて考える授業がある(をしている)」という質問項目に関する肯定的回答率も、児童、保護者ともに約10ポイント上昇している。

本校では、昨年度は全学年で「わくわくシート」、「のびのびシート」、「ぐんぐんシート」というワークシートが目的別に活用されており、高学年になると職業調べを実施している。例えば「わくわくシート」は、夏季休暇前に配付され、児童が夏休み中に努力したことや体験したこと、お手伝いやボランテ

ィア等について記録するものである。児童は、これらのシートを見返すことで、自分が重ねた努力の道筋を確認することができる。この取組も、上述の「2. 重点項目」の節でも取り上げた「わたしには（子どもたちには）努力できることがある」という項目の肯定的回答率の高さや、表3の「目標を持ち、その実現にむけて努力している」という項目の肯定的回答率の上昇と関連しているかもしれない。

昨年度の報告書でも指摘されている「キャリア・未来デザイン教育」に関する評価項目における全体的な肯定的回答率の低さは、「キャリア」という言葉が一般的にどのように理解される傾向があるかを踏まえて検討する必要があるだろう。

「キャリア」という言葉を聞くと、多くの大人はおそらく職業的な経歴に関することをイメージするのではないだろうか。それに対して教育領域では、「キャリア」はより広義な意味で人の人生や生き方を意味し、「キャリア教育」と「職業教育」は区別される。文部科学省によるキャリア教育の手引きでは、小学校段階では、低学年では学校の適応、中学年では友達づくりや集団の結束力づくり、高学年では集団の中での役割の自覚や中学校への心の準備、という段階を経て発達するという視点を持って、児童のキャリア教育を進めることの重要性が指摘されている。

本校の保護者は、学校公開や学校行事、PTA や地域主催行事への参加に関する肯定的回答が多く、学校教育へ協力的な意識をおもちの方が多いと言える。保護者や地域の方々が集まる何らかの機会に、教育領域の「キャリア観」についてご説明する場を設け、その活動を断続的にでも実施できるならば、本校で実施されている「キャリア教育」に関する理解啓発ができるのではないだろうか。実際、本校では年に複数回の地域行事が開催されている（例 1月のどんど焼き）。このような場に参加する子どもは、自分の保護者が教員とともに運営者となって働く姿や、自分の保護者と学級児童の保護者が協力する姿も目にするだろう。また、保護者が子どもと一緒に行事を楽しむ時間となったり、卒業生である保護者が子どもに思い出を語ったりする機会ともなるだろう。これもまさに「キャリア教育」の一環となる取組と言える。

6 総合所見

昨年度の総合所見では、気になる兆候として、年々落ち着きのない児童が増加していることが挙げられている。上記の今年度の報告では、主に回答対象毎（児童・保護者・地域）の全体結果を分析し考察してきたが、学年毎の分析においては、アンケート協力者の心の中にある憂慮の表れとも推測できる回答も見られた。実際、今年度1学期に委員が初めて学校訪問した際にも、確かに前年度に指摘されている状況があった。

この種の問題は、解決までに直線的な推移を辿ることはほぼなく、一朝一夕な変化を期待することも困難であろう。変化するとすれば、おそらく、その形状は不連続な螺旋状で時には、一進一退もあると予想できる。変化の過程では構成員一人ひとりの問題に向き合う姿勢と根気強い実践が求められ、長い目で見守る必要があるだろう。また、学校の全体としての継続的な取組も、変化を促す鍵となるだろう。

う。

本校には、管理職や担任を含む教職員はもちろん、学校包括支援員・学校生活サポーター・スクールカウンセラーなどの様々な専門性をもつ方々との連携・協働の体制がある。さらには保護者の方々からの協力を得つつ、学級での児童の学びを最大限に保障しようとする実践が日々なされてきている。この取組の効果は、今回のアンケート結果には明確な形では表れていない。しかし、委員の聞き取りでは、教員の中には、「この1年間で児童が変わってきた。」と変化の感触を掴んでいる方が複数おられることを確認した。他にも、“何か起きたときはチャンス”と捉える視点をおもちの方、専門家との連携・協働を意識した動き方をされている方、「本校は保護者からの協力を得やすい環境。」と語る方もいらした。加えて、高学年がこれまでの学校生活を振り返る学習をしたところ、児童が「〇年（低学年）のときは落ち着かなかった。」「〇年の時は荒れたけど△年では元に戻った。」と、客観的な視点から過去の出来事を思い出しなが自分たちの変化・成長について語る場面があった、という話も耳にした。

今後も学校全体として継続的な取組を実施することで、上記の聞き取りから得られた言葉に見られるような自己効力感や自分自身の変化・成長の実感を持てる教員や児童がひとりずつでも増えていくことを願いたい。本報告書がそのための一助となるならば幸いである。

笹原小学校学校関係者評価委員会委員

小澤利喜男 菊池実香 黒住早紀子

外山悦朗 前橋春夏 （五十音順）

事務局

小林保子